明治天皇行幸における華族邸宅の能楽御覧所について

THE STUDY ON NOH SPACE OF NOBLE RESIDENCE FOR ENTERTAINING MEIJI EMPEROR

奥 富 利 幸*

Toshiyuki OKUTOMI

In this study, I analyze the composition of Noh space (in Japanese named as *Nohgaku-golan-jo*) of nobility residence in the Meiji period. *Nohgaku-golan-jo* is an *Ima* (room) for daily life, but it is changed to a place to watch Noh when Emperor visiting. At first, I clarify when and where and how many times Noh were played as entertainment events for entertaining Meiji Emperor, by using the official documents "*Meiji Tenno ki*". The second, I examine the space of *Nohgaku-golan-jo*, for example, how is the surrounding of Noh stage, how the stage being layout with the main building, more further, when events was opening how to use the spaces including the other rooms of the residence. I take up Toshinari Maeda's house as a case of nobility residence, because there left rich documents recording the event for Emperor. In addition, comparison the Noh event for the general visiting at Edo era, I will make clear what part of the event space to play Noh was changed in Meiji era.

Keywords: Noble Residence, Noh Stage, royal visit, Meiji Emperor
華族邸宅 能舞台 行幸 明治天皇

1. はじめに

本研究では、明治期の華族邸宅への天皇行幸における能楽御覧所について検証を行いたい。まず、天皇行幸の供応行事としての能楽が、どの程度実施されたのかを確認するために、明治天皇に関する最も公式な記録である『明治天皇紀』によって、年代と場所と回数の分析を行う。次に、行幸における諸室の構成や使われ方について、能楽御覧所の能舞台周辺の状況も含めて考察したい。具体的には、明治期での行幸のうち、『明治天皇紀』でもっとも詳細に記録され、明治期最後の行幸能として行われた1910年（明治43年）7月8日の前田利為邸の行幸を代表事例として取上げ、検討を行う。また、江戸時代において、明治期の天皇行幸と類似した先行行事である將軍御成について、そこで行われた能楽御覧を採り上げ、御成における能楽御覧の次第について、邸宅の使われ方と関連させて分析を行う。具体的には、1698年（元禄11年）3月18日の尾張家江戸麹町邸における綱吉の將軍御成を取上げる。そして、両行事での能楽御覧の次第と邸宅での能楽御覧所の構成を比較することで、明治期の華族邸宅における能楽御覧所がどのような歴史的経緯をもって形成されたのか、さらに、明治期の皇室と華族の絆を取り持った天皇行幸において、能楽御覧が担った役割の重要性を実際の行幸行事の次第を検証することで明らかにしたい。

2. 天皇行幸と能楽御覧

明治天皇は、行幸によって日本各地を巡り、明治維新後の日本をつぶさに見て歩かれた。1868年（明治元年）の御東幸、京都還幸、

1872年（明治5年）の中国、西国巡幸、1876年（明治9年）の東北巡幸、1878年（明治11年）の北陸東海巡幸、1880年（明治13年）の山梨、三重、京都巡幸、1881年（明治14年）の奥羽、北海道巡幸、1885年（明治18年）の中国巡幸などにより、北は札幌から、南は鹿児島までを巡幸されている^{※1}。こうした全国各地への巡幸の合間には、東京で華族邸宅に行幸する機会を持ち、行幸に際して能楽が催されることが恒例であった。また、『明治天皇紀』では、天皇以外に、皇太后や皇后、皇太子の行啓での能楽御覧も記録されており、能楽御覧が行幸啓における重要な行事として定着していたことが伺える。明治天皇紀能楽関連年表（表-1）によると、1876年（明治9年）4月3日の岩倉具視邸の行幸における能楽御覧を皮切り^{※2}に、1912年（明治45年）6月10日の皇后の靖国神社能楽堂行啓に至るまで、実に85回の行幸啓における能楽御覧が記録されている。このなかで、特徴的な点が二つある。一つは、85回の能楽御覧のうち、明治天皇の行幸における回数は33回、皇太后の行啓における回数が47回と天皇のそれを上回っていること。そして、皇太后は1897年（明治30年）1月11日に崩御されているから、明治天皇より15年間も短い間に、天皇より頻繁に能を御覧になったことである。もう一つは、皇太后が崩御された後に明治天皇が能を御覧になったのは、1910年（明治43年）7月8日の前田利為邸行幸時の一度だけということである。つまり、能楽御覧は天皇にとって、英照皇太后と交流する機会ともなっていたことが考えられる。そして、この点は次のことから裏付けられる。つまり、演能場所別の回数では、青山御所の行幸啓が13回で最も多く、そのうち、明治14年12月16

* 小山工業高等専門学校 准教授・博士(工学)

Assoc. Prof., Oyama National College of Technology, Dr. Eng.

日の演能では、天皇が奥羽と北海道の巡幸からの帰館を祝ってのものであった^{注3}。また、その他の演能場所の34回が、華族邸宅への行幸啓における演能であり、能楽御覧が行幸啓における恒例の催しとなっていたことがわかる。そして、記録の多くが、能楽を演じる場所を能楽御覧所と表現しており、例外として、1885年（明治18年）12月26日の有栖川宮邸に行幸では、踏舞場という表現をしており、踏舞場が能楽御覧所に転用されたことがわかる^{注4}。また、1891年（明治24年）4月10日の川村純義邸に行幸や、1893年（明治26年）6月2日の土方久元邸に行幸では、庭上の能楽御覧所という表現が使われ、能楽御覧所が庭に能舞台を設けた状況を示していたことが伺える^{注5}。この能楽御覧所の様子を知る上で貴重なのが、1910年（明治43年）7月8日の前田利為邸への行幸である。

このように、明治天皇行幸による能楽御覧は、明治元年から30年までの間に主に行われ、能楽御覧所と呼ばれる庭上に造られた能舞台とそれと対峙する母屋が主な構成であった。当時は、明治維新で能楽を演じる場所が悉く失われ、1880年（明治13年）の能楽社の誕生で復興の機会が到来するが、能を演じる施設はたいへん少なく、天皇行幸による演能が能楽師に演能の機会と場所を提供する役割を担い、能楽の存続に大きく寄与していたことがわかる。

3. 将軍御成の能楽御覧所

明治期の天皇行幸における能楽御覧と江戸期に行われた将軍御成の能楽御覧は、臣下が最高の賓客を招く行事での余興芸能という点で同様であるが、定まった規則により儀式として行われた点も類似し、さらに、臣下宅の各部屋を巡回しながら行事が進行するという形式も同じである。天皇行幸を賜った明治期の華族は、1869年（明治2）6月17日の版籍奉還に伴い成立したが、公卿と諸侯を合わせて華族という身分がつけられ、公卿は皇室の藩屏である廷臣、諸侯は徳川幕府の封建大名であった。つまり、華族の一部は、江戸期に将軍御成を行った家柄ということになる。つまり、行幸における能楽御覧所は、邸宅の和館を見所とし、その前庭に能舞台を設けるが、この配置は書院の広間を見所とし、前庭に能舞台を設えた江戸期の『匠明』の「当代広間ノ図」（図1）を規範とする武家屋敷の構成を基本的に踏襲している。そこで、次に、将軍御成と天皇行幸の能楽御覧を比較してみたい。

将軍御成では室町期になると故実書が書かれて、幕府式案として定着した^{注6}。さらに、江戸時代になると建築技術書の普及と相俟ってその完成度を高めた。「当代広間ノ図」では、広間の上段の間の正面白州に能舞台を配置している。将軍御成では、武家屋敷の様々な場所を巡って進行するのであり、広間の西奥は、客の居間に当たる「御成御殿」、能舞台のある白州を挟んで南側に「スキヤ」、つまり茶室がある。こうした接客部分は、武家屋敷全体の面積の約三分の一を占めており^{注7}、他の主人、家来、女中の日常生活部分と完全に独立し、使われ方は、殿舎ごとに分類することができる^{注8}。大広間では、謡始、嘉定、将軍宣下、外国使臣謁見、能楽などであり、白書院では、玄猪、舞楽、管絃、蹴鞠、武術など。黒書院では、連歌御会、碁御覧など。御座所では、夏越しの祓、煤掃、節分、元服などである。つまり、能舞台が対峙した大広間は、接客部分の中で、最も公式な謁見の場所であったことがわかる。

次に江戸時代における将軍御成の事例として、1698年（元禄11

表1 明治天皇紀能楽関係年表

年代 西暦	和暦	行事名	演能 有無	演能場所		
				青山	芝	その他
1876	M090404	岩倉具視邸に行幸 能楽御覧	○			1
	M090405	皇太后皇后岩倉具視邸に行啓	○			1
	M090505	親王内親王邸に行幸	○			1
	M090518	皇太后親王内親王邸に行啓	○			1
1877	M100203	桂宮邸に臨幸	○			1
1878	M110705	青山御所能舞台開に臨幸	○	1		
	M111120	青山御所に行幸能楽を覧たまふ	○	1		
1879	M120410	前田利為邸に行幸	○			1
	M120420	前田利為邸に立ち寄り	○			1
	M120818	岩倉具視邸に行幸	○			1
	M120819	皇太后皇后岩倉具視邸に行啓	○			1
1880	M130426	青山御所に行幸能楽を御覧	○	1		
	M130508	大木痛任邸に臨幸	○			1
	M130609	寺島宗則邸に臨幸	○			1
	M130717	桂宮邸に臨幸	○			1
	M131105	青山御所に行幸能楽を御覧	○	1		
1881	M140416	皇太后芝能楽社に行啓	—			
	M140521	皇太后皇后芝能楽社に行啓	○		1	
	M140706	青山御所に行幸能楽を御覧	○	1		
	M141216	青山御所に行啓能楽等を御覧	○	1		
1882	M150203	皇太后芝能楽社に行啓	○		1	
	M150516	皇太后芝能楽堂に行啓	○		1	
	M150522	青山御所に行幸能楽を御覧	○	1		
	M150620	青山御所に行幸能楽を御覧	○	1		
	M151024	皇太后皇后芝能楽社に行啓	○		1	
	M151205	皇太后芝能楽堂に行啓	○		1	
1883	M160206	皇太后皇后芝能楽堂に行啓	○		1	
	M160327	皇太后芝能楽堂に行啓	○		1	
	M160523	青山御所に行幸番組を御覧	○	1		
	M160608	皇太后芝能楽堂に行啓	○		1	
	M161119	青山御所に行幸番組を御覧	○	1		
	M161203	皇太后芝能楽堂に行啓	○		1	
1884	M170216	皇太后芝能楽堂に行啓	○		1	
	M170408	皇太后皇后芝能楽堂に行啓	○		1	
	M170527	皇太后芝能楽堂に行啓	○		1	
	M171007	皇太后皇后芝能楽堂に行啓	○		1	
	M171119	青山御所に行幸番組を御覧	○	1		
1885	M180224	皇太后芝能楽堂に行啓能楽等を御覧	○			1
	M180318	皇太后芝能楽堂に行啓	○		1	
	M180604	皇太后芝能楽堂に行啓	○		1	
	M180624	能楽保存に関する思召	—			
	M181004	皇太后皇后芝能楽堂に行啓	○		1	
	M181125	皇太后芝能楽堂に行啓	○		1	
	M181226	有栖川宮邸に行幸	○			1
1886	M190304	皇太后芝能楽堂に行啓	○		1	
	M190429	皇太后皇后芝能楽堂に行啓	○		1	
	M190614	青山御所に行幸能楽を御覧	○	1		
	M191110	伏見宮邸に行幸	○			1
	M191111	皇太后皇后伏見宮邸に行啓	○			1
	M191116	皇太后芝能楽堂に行啓	○		1	
	M191203	青山御所に行幸能楽を御覧	○	1		
1887	M200201	新古典美術会に臨幸	○			1
	M200601	皇太后皇后芝能楽堂に行啓	○		1	
	M200614	皇太后九條道孝邸に行啓	○			1
	M201007	皇太后芝能楽堂に行啓	○		1	
	M201031	徳川家達邸に行幸	○			1
	M201101	皇太后皇后徳川家達邸に行啓	○			1
	M201213	皇太后芝能楽堂に行啓	○		1	
1888	M210515	皇太后芝能楽堂に行啓	○		1	
	M211001	皇太后芝能楽堂に行啓	○		1	
	M220501	皇太后皇后芝能楽堂に行啓	○		1	
	M221009	皇太后芝能楽堂に行啓	○		1	
1889	M230626	山田顕義邸に行幸	○			1
	M230627	皇太后皇后山田顕義邸に行啓	○			1
	M231031	皇太后皇后大山巖邸に行啓	○			1
	M231115	大山巖邸に行幸	○			1
	M231213	皇太后芝能楽堂に行啓	○		1	
1890	M240406	皇太后芝能楽堂に行啓	○		1	
	M240410	川村純義邸に行幸	○			1
	M240411	皇太后皇后川村純義邸に行啓	○			1
	M240428	皇太后九條道孝邸に行啓	○			1
	M241116	池田章政邸に行幸	○			1
	M241120	皇太后皇后池田章政邸に行幸	○			1
1891	M250212	皇太后芝能楽堂に行啓	○		1	
	M250415	皇太后皇后芝能楽堂に行啓	○		1	
1892	M260328	皇太后芝能楽堂に行啓	○		1	
	M260602	土方久元邸に行幸	○			1
	M260603	皇太后皇后土方久元邸に行啓	○			1
	M260606	皇太后芝能楽堂に行啓	○		1	
	M261208	皇太后芝能楽堂に行啓	○		1	
1893	M270427	皇太后芝能楽堂に行啓	○		1	
1903	M361209	能楽会に賜金	—			
1907	M400613	皇后神代神社能楽堂に行啓	○	1		
1910	M430708	前田利為邸に行幸	○			1
	M430710	皇后前田利為邸に行啓	○			1
	M430713	皇太子、皇太子妃前田利為邸に行啓	○			1
1911	M440610	皇后神代神社能楽堂に行啓	○		1	
1912	M450610	皇后神代神社能楽堂に行啓	○		1	
	M450730	崩御	—			
				13	38	34
				85		

注：和暦のM090403は明治9年4月3日を示す。演能有無は、○が有、一が無を示す。演能場所は、青山が青山御所能舞台、芝が、能楽社、能楽堂、靖国神社能楽堂を示す。

年) 3 月 18 日の尾張家江戸麹町邸における綱吉の御成^{注9}を確認したい。①御成書院で刀などを下賜。②表書院で献上品の献上。③御成書院で三献之儀と賜物、献物の授受、七五三の膳、千代姫との対面。④休息間で献上品の献上。⑤御成書院で「論語」の講演^{注10}。⑥表書院で能楽の御覧、能三番、狂言二番を御覧。⑦休息之間で休憩、香炉や絵を所望に応じて献上。⑧御成書院で仕舞^{注11}。御成書院では、綱吉と綱誠も舞を披露し、ここでの能は表書院より娯楽性の強い催しであった。こうして、將軍御成は、御成書院—表書院—御成書院—奥小座敷—休息之間—御成書院—表書院—休息之間—御成書院と部屋を移りながら進行し、能楽御覧では、場所も性質も異なる催しが2回あり、能楽師のみが演じる1回目と能楽師のほか、將軍と邸主や家臣が演じる2回目が行われた。このように、江戸時代の武家屋敷における能舞台とその周辺の演能空間は、基本的に御成の規式での演能の故実と建築規範書によって強く規定され、江戸期を通じて踏襲された。しかし、この尾張家江戸麹町邸の綱吉の御成では、接客の中心が広間から書院に変化して、能舞台の位置は広間上段前から表書院前に変化している^{注12}。これは、武家屋敷の配置構成が「匠明」の定める規範から徐々に離れ、自由度が増すことで、能舞台と見所たる書院の関係に微妙な変化が生じるようになったことを示す。こうした変化の要因として、能は武家式楽の儀式として役割を担うほかに、日常生活では趣味や教養として行われたため、当初は儀礼が強く意識された広間と前庭の能舞台という配置構成から、書院からの庭の眺望も重視するといった居住性や趣味的志向が強くなったことが考えられる。

4. 天皇行幸の能楽御覧所

『明治天皇紀』に記録されている能楽御覧では、その実施数の約三分の一が華族邸で行われている。そのうち、明治期の能楽の復興に大きく貢献した前田家の事例を通して、天皇行幸の能楽御覧場について検討を進めたい。前田家の本拠地は、加賀宝生で知られる能楽の盛んな土地柄であるが、13代当主の前田斉泰は、明治期の能楽界の一大行事であった岩倉邸の天覧能で演能したのを初め、能楽社の創設では発起人として中心的な役割を担った。明治初頭の前田家には本郷に本邸、根岸に別邸があった。本邸は元々1616年(元和2年)に第三代利常が、加賀下屋敷として幕府より賜ったことに始まり、1657年(明暦3年)の大火で辰の口の上屋敷が焼失してからは、ここが上屋敷として使われていた^{注13}。行幸は本郷本邸で行われたが、根岸別邸においても、大正期に外国賓客の訪問があった。1910年(明治43年)7月8日の前田利為邸行幸啓は明治期における盛大な行幸の一つであった。この行幸を主催した前田利為は、1885年(明治18年)6月5日に旧七日市藩前田家第12代前田利昭の5男茂として生まれ、東京で教育を受けていた。このとき本家に当たる旧加賀藩前田家第15代前田利嗣は、病床にあって後嗣となる男子がおらず、茂を養子として迎えた。1900年(明治33年)6月13日に16歳であった茂が養子となって、前田家16代侯爵前田利為を襲名した。実は、先代の利嗣には、前田邸への行幸を実現させるという宿願があったという。つまり、以前の1879年(明治12年)4月10日に前田利嗣邸行幸があり、このときには、東京府北豊島郡王子村にあった印刷局抄紙部に、右大臣岩倉具視、参議井上馨、大蔵卿大隈重信が伴い行幸した帰りに立ち寄り、太政大臣三條實美と熾仁親王が利嗣邸で

図1 当代広間の図(日本建築学会編『日本建築史図集』彰国社)

図2 前田家本郷邸能舞台平面図(『能楽』11巻5号)

図3 前田家本郷邸能舞台正面図(『能楽』11巻5号)

合流し、利嗣家族の拝謁、下賜の後、能楽御覧所で能楽を散覧し、晩餐と献品の後に午後8時に還幸された。また、同年4月18日には、皇太后、皇后が同じく印刷局抄紙部に行啓の際に利嗣邸に立ち寄り、能楽を御覧になっている^{注14}。そして、再度の行幸を望んだのである。それを受けて、利為は、1899年(明治32年)1月家政評議会^{注15}に諮って、「本郷邸ヲ永遠ノ本邸ト定メ、第宅ヲ改築スル事」^{注16}として、本邸の新築と仮住居の建設を決定した。同年12

月に起工し、途中で日露戦争による中断はあったが、1905年（明治38年）12月に和館が、1907年（明治40年）12月に洋館が竣工した。そして、1910年（明治43年）1月11日に前田利為邸行幸啓の内容を受けた。したがって、実に行幸の10年以上も前から行幸に向けた準備が始まっていたことになる。また、行幸啓の準備に当り、先に行幸を賜った鍋島、井上侯爵家と土方伯爵家等から行幸記録一件を借用して参考とし、宮内省との連絡を密にとって準備作業が進められた^{註17}。したがって、明治期の行幸啓では、基本的に前例を参考として、宮内省と綿密な打合せの上で、当日の会場や進行が決められていたことがわかる。

新築された前田利為邸は、当期の華族邸宅の代表的な形式であった和洋館併置式の住宅であった。工事では、洋館（図4）の設計と工事の総監督を海軍技師で工学博士の渡辺謙、和館の設計と監督を海軍技師の北沢虎造、洋館施工責任者に赤石真を選任した。

また、庭園構築と洋館内部装飾は、建物完成後に実施されるが、庭園に関しては、「染井の庭彦」として知られていた伊藤彦右衛門の二代目、伊藤嘉市が担当した。また、洋館内部装飾はフランスでの留学を終えて帰国した野口駿尾が、玄関左右の武将像は美術学校教授の沼田一雄が担当した。能舞台は、和館の東南隅の座敷に北面して建てられ、能舞台の周囲は塀で仕切られ、脇正面側には、舞台と橋掛りに向かって見所である座敷が設けられている。そして、能舞台の周囲には、陪覧者のために仮設の屋根が架けられていた。

こうして、行幸のために設けられた能舞台は、和館の広間に対峙する形で設けられていた。このときも、能楽御覧所という表現が成されているほか、能舞台については、「能楽は天覧餘興中主なるものにして、其の舞臺は百二十餘日の日子と二萬二百圓の巨資と投じて新たに造る所」と造営に力が注がれていたことが分かる。

行幸当日の行事進行を前田利為邸行幸進行表（表2）にまとめた。まず、表の縦軸に行事次第が時間の経過順に並べ、入御が11時12分過ぎ、還御が6時57分であったので、8時間程度の行幸であったことがわかる。また、横軸には、建物の各室名称を記載した。但し、参考資料によって室名表記が異なるため、各資料の室名をそのまま表記し、その下に典拠を示した。図内の印は、天皇、または、その使者が各行事で在室された室を示しており、各印を結ぶ線は、天皇またはその使者の移動経路を示す。

行事次第を眺めると、行事の内容は、拝謁、下賜、献上、絵画・家什御覧、能楽御覧、琵琶演奏、昼・晩餐などであり、「儀」と「宴」を巧みに組み合わせている。これは將軍御成における構成との類似性が伺える。前田家では初代利家の時代から將軍御成を受けており、1593年（文禄2年）9月29日には豊臣秀吉、1617年（元和3

表2 前田利為邸行幸進行表

行事次第	館区分 室名		洋館		和館				
	便殿	余興室	洋館階上	能楽御覧所	奥小座敷	垂簾の間	控えの御室	御座所	一室
	M	M	M	M	M	A	H	H	M
①茶菓									
②単独拝謁 利為・漢子・朗子、伯爵前田利同夫妻、 子爵前田利豊夫妻、子爵前田利定夫妻 故子爵前田利昭寡婦春子、男爵前田利功									
③下賜・授与 （宮内大臣子爵渡邊千秋より利為に目録授与） 御紋附料紙文庫硯箱一組（利為） 御紋附銀花瓶一對（利為）、紅白縮緬二匹（漢子） 白縮緬二匹（朗子）、白絹各一匹（利為の男・親族） 金千圓（家臣一同）									
④献上（利為より宮内大臣子爵渡邊千秋に目録献上） 北野郷義弘の刀一口、源俊賴筆萬葉集一冊 金澤由木尾雪雄作嵐山時絵料紙硯箱一組 丸谷新製松鉦模様花瓶一對、今石動名産薄氷 菓子金澤名産御所落雁、井波名産産絲落雁									
⑤絵画御覧 川端玉章：花鳥の図、荒木寛敏：松林山水の図 竹内栖鳳：瀑布の図、山元春舉：保津川の図									
⑥御覧餐									
⑦揮毫の席御覧（侍従日野西資博）									
⑧能楽御覧 櫻間伴馬：俊寛、野口政吉：熊坂、梅若六郎：土御 山本東次郎：二九十八、野村万造：鞠座頭 （供奉高等官・利為と家族・親族・舊藩士等陪覧）									
⑨家什御覧（帝室博物館総長股野琢説明） 伏見・花園・後醍醐三朝宸翰二卷 菅原文時筆御室寶篋一巻、藤原清輔筆古今和調集 足利尊氏・同直義・僧疎石合筆寶篋經1帖 豊臣秀吉高山園に與ふる書一巻 豊臣秀吉三國府置太早計一巻 伊勢内外宮神寶式目併神寶圖五巻 土佐行長筆天神縁起畫三巻、源俊房自筆左記二巻 藤原良房太刀一振及び平緒一掛 大傳太光世太刀一振、太郎作正宗刀一口 古備前正恆刀一口、一文宇助光眉尖刀一振 楠木正成訣子圖贊一幅、小野道風筆唐居易詩一巻 楠木正成與判文書一通									
⑩庭園御覧									
⑪休息 陳列品御覧 後藤祐乗作刀劍小道具優秀品 大傳太光世太刀一振再度御覧									
⑫洋館階上各室巡覧（侍従長侯爵徳大寺實則） 川端玉章：月兎、荒木寛敏：竹鶏 福井江孝：犬									
⑬薩摩琵琶演奏 西幸吉：小楠公、金剛石									
⑭晩餐									

注：典拠区分の記号の意味（M：明治天皇紀，A：ある華族の昭和史，H：風俗画報411号），図中の接続点の意味（○：明治天皇紀，△：ある華族の昭和史，◎：風俗画報411号），図中の矢印の意味（実線：天皇の移動，点線：天皇の命による侍従の移動）

図4 前田本郷邸洋館（『能楽画報』2巻8号）

年）5月13日には、徳川秀忠の御成があった。秀忠の御成では、茶事、式三献、賜物、献物、演能、饗膳が、数奇屋、御成書院と広間を順次移動しながら進化した。また、將軍御成では、「御成書院」で「儀」の中心である「式三献」などの行事が行われたが、天皇行幸では、西洋館に「便殿」を置き、その玉座で中心行事である「謁見」を行っているため、「御成御殿」と「洋館」、「広間」と「和館」

という対応関係が見てとれる。明治期の和洋併置式邸宅では、一般に「洋館」を迎賓、「和館」を生活の場として使っていたわけであるが、行幸の要となる便殿を洋館に置いたことは、洋館を迎賓館とした当時の使われ方を裏付けている。また、昼・晚餐での準備では、宮内省大膳課の職員が前田家の膳所で調理しており、当時の洋館では、料理をする際のおいや音を嫌って、厨房を設けなかったことがわかる。つまり、調理を和館の膳所で行い、洋館まで運び入れたわけである。また、前田邸の玄関は西向きで、南側に洋館、北側に和館の玄関があつて、「迎賓館」としての洋館の方が道路から近くに配置されていた。便殿は行幸での常座であるが、洋館の2階に設置され、ここから各行事を行う部屋に移動したのである。当日の行幸の進行では、洋館玄関に馬車をつけ、天皇が便殿に入る。茶菓は、「御成」の茶事で、まずは小休頂き、その後、前田家の家族と一族が拝謁を賜る。そして、天皇から下賜品を頂戴し、前田家から献上品を奉る。その後、『明治天皇紀』^{注18}では、絵画御覧となり、予め用意された画家の作品を便殿で御覧になるが、『風俗画報』^{注19}の記事では、御昼餐の前に、和館に通御の際に拝謁し、御休息の後に家什御覧になっている。続いて、揮毫の席を御覧になった後、便殿に戻って昼餐となる。『明治天皇紀』では、昼餐の間に、侍従日野西資博を揮毫の席に使わせており、内容が異なる。そして、能楽御覧所に出御するのが、午後1時55分である。また、能楽御覧所に出御する際に拝謁があつたことが『風俗画報』と『前田利為』に記録されているが、『明治天皇紀』には記載がないため省略された可能性が高い。続いて、能楽御覧の途中、天皇が「垂簾の間」で休息されたことが『ある華族の昭和史』^{注20}に記載されているが、この点も『明治天皇紀』には記録がない。その後、家什御覧は、各記録とも一致している。また、庭園御覧に『明治天皇紀』では、「宸囑を新造の庭園に賜うこと霎時」とあり、庭園には出御せずに御覧になったと解釈できるが、『前田利為』においても、「同陳列館縁側より瀑布の景観を覧あつて」とその点が確認できる。続く休息中には、洋館階上各室巡覧に侍従長徳大寺實則を遣わしている。その後の薩摩琵琶の演奏の後に便殿にて晚餐をとられて環御された。この行幸の様子は、行幸絵巻物として、「臨幸画巻」が作成された。この画巻は、岡倉天心を顧問として、下村観山が作画、詞書は永山近彰の記事を幸田露伴が校正し、尾上柴舟筆致により1928年（昭和3年）9月に完成した。この画巻を見ると行幸で各室に展示された前田家秘蔵の文書や所蔵品を見ることができる。

その後、前田家本邸の能舞台は、1923年（大正12年）9月に起こった関東大震災で、宝生家の能舞台が焼失する事態から、宝生会より能舞台の貸与を求められた。前田家では、当初行幸記念物であった能舞台の貸与には慎重論があつたが、当主利為の意向により、三年間の貸与が決定された。結局、この能舞台は太平洋戦争で焼失するまで宝生流で使われることになった。

5. まとめ

華族邸宅の能楽御覧所の建設は、江戸期の将軍御成御殿の基本的形式、つまり、将軍が城の御殿や武家屋敷などの書院居間から白州に建つ能舞台で演じられる能を観ていたことが、明治期に受け継がれたことがわかった。さらに、将軍御成では、御成御殿と能舞台は新築されて将軍を迎えたが、その規範は「匠明」などの技術書で定

められていたが、明治時代になって、将軍御成と類似した天皇行幸が行われるようになると、旧来通りに能舞台を準備して、供芸芸能として能が演じられたのである。そして、1876年（明治9年）4月4日の岩倉邸での行幸で、初めて能が行われたことにより、明治期を通して続けられる天皇行幸における能楽御覧が催されることの前列となり、その後の行幸の次第を規定することになった。しかし、能楽御覧所は従前のまま継承されたわけではなく、明治期の華族邸宅の代表的形式であつた和洋館併置式の住宅において、行幸時には、「洋館」においては「儀」に当たる儀礼行事、また、「和館」においては「宴」に当たる遊興行事を中心に割り当て、洋館と和館を往復して行幸行事を進行させたことがわかった。したがって、和館と前庭の能舞台とその周辺空間で構成された能楽御覧所は、行幸行事における遊興の中心的な場であつた。前田家本邸の行幸では、能楽御覧所として和館の東南隅の前庭に北面した能舞台が当てられたが、白州には大勢の陪覧者が観能できる場所が設けられた。こうした状況は、明治時代の行幸における能楽御覧所に共通する課題であつた。そして、陪覧者が皇族や大臣、侍従や官僚であつたことから、陪覧席には仮設の屋根でかけられたが、この点については、邸宅の能舞台周囲の観覧所の室内化の傾向として、能楽堂との関連を含めての検証が必要と考えられる。

注

- 1) 明治天皇巡幸日誌は、星野武男『明治天皇行幸史録』東京潮書房、1931年12月発行など。
- 2) 宮内庁『明治天皇紀第三』吉川弘文館、1969年12月発行、p585、1876年（明治9年）4月3日に、「蓋し東京に於て能楽を天覧ありしは是れを嚆矢と為す」とあり、遷御後初めての能楽御覧であり、その後の行幸における定例行事のさきがけとなった。
- 3) 宮内庁『明治天皇紀第五』吉川弘文館、1971年3月発行、p587、1881年（明治14年）12月16日「皇太后、青山御所に於て能楽を催させらる、山形秋田両県・北海道巡幸の了るを祝したまはんがためなり」とある。
- 4) 宮内庁『明治天皇紀第六』吉川弘文館、1971年11月発行、p520、1885年（明治18年）12月26日「親王踏舞場に能楽を張り、金剛・宝生・梅若諸家の能楽及び囃子・仕舞等を覧に供へ」とある。
- 5) 宮内庁『明治天皇紀第七』吉川弘文館、1891年4月10日川村純義邸行幸「庭上設くる所の能楽御覧所に臨御」また、同じく、1893年（明治26年）6月2日の土方久元邸行幸「庭上の能楽御覧所に出御」とある。
- 6) 佐藤豊三「将軍家「御成」について（一）一室町将軍家の御成一」『金鏡叢書』
- 7) 太田博太郎『「匠明」にみる書院造の配置』『書院造』東京大学出版会、1966年10月20日、p36
- 8) 平井聖「近世武家住宅の機能」『日本の近世住宅』鹿島研究所出版会、1968年12月20日、p160
- 9) 佐藤豊三「将軍家「御成」について（八）一徳川将軍家の御成 その三一徳川幕府安定期の御成」『金鏡叢書』p321
- 10) 前掲注9、将軍自ら、御成先の当主一門、家臣、幕府重職の前で「大学」「中庸」「論語」「孟子」などの儒書を讀じ、1690年（元禄3年）の綱吉の牧野成貞邸御成での「大学」が初見とされる。
- 11) 前掲注9、演者は、主客である将軍綱吉と邸主の尾張綱誠と家臣である。
- 12) 前掲注8、『日本の近世住宅』p168、近世諸大名の屋敷で、表向殿舎の構成が、接客機能により、2つの御殿になって、近世的殿舎構成の主体が成立した。諸大名の江戸藩邸でのこの傾向は、明暦の大火による建替え時に顕著にあらわれ、接客と対面にあてた二つの御殿の名称が「広間一書院」から、「大書院一書院」に変化した点を指摘されている。
- 13) 前田利為伝記編纂委員会『前田利為』前田利為伝記編纂委員会、1986年、p92
- 14) 宮内庁『明治天皇紀第四』吉川弘文館、1970年（昭和45年）8月15日、p650
- 15) 前掲注13『前田利為』p95「新邸を西洋館、日本館とし、起工日を十二月二十五日、竣工を明治三十八年度中と概定」とある。
- 16) 前掲注13『前田利為』p94、「明治32年1月の評議会の決定に二つの事項を決議した。「一、本郷邸ヲ永遠ノ本邸ト定メ、第宅ヲ改築スル事。一、豊多摩郡大久保村所有地内ニ、新二別荘ヲ建築シ、非常立退き、随時静養ノ所トスル事。」とある。
- 17) 前掲注13『前田利為』p103、「一月三十日準備業務を左のごとく十五に区分し、それぞれに責任者を配し準備委員長の指揮下に配した。西洋館装飾、日本館装飾、設備（能楽余興場、写真撮影、根岸土木工事、庭園造築）以下省略」とあり、能楽余興場も準備業務の主要項目の一つに上げられている。
- 18) 宮内庁『明治天皇紀十二』吉川弘文館、1970年8月15日、p432~435
- 19) 『風俗画報』411号1910年8月5日、p4~8
- 20) 酒井美意子『ある華族の昭和史』主婦と生活社、1982年2月20日

(2007年4月10日原稿受理、2007年7月2日採用決定)